

第六十七回

〇先生賞候補作品

本年度の〇先生賞選考では、受賞作品のほか候補作品二十篇が決まった。このうち優秀作品三篇、佳作として九篇をそれぞれ抄出し掲載する。

優秀作品 五十一年生 有川 知津子

ふるさとの島のみなみの砂浜におほきな亀の来る夜がある
闇の夜のなぎさに立てば陸をかよりも子亀のめざす海はあかるし
ウイルスの眠らぬ夜をちかちかと更新されてゆくウィキペディア
あまさかる鄙の医療の現実をすこし思つて夏を帰らず
帰省せぬ夏なかりしよなんとなくとんがつてゐたあの夏でさへ
母よりのメールのトーンしづかなり祖霊迎への火をととのへて
灯籠に梅鉢の紋うかびるんほのほ色づくゆふまぐれどき
つるべして祖父使ひるし石の井戸ときをり母が手をあてゐたる
祖父が祖母にプレゼントした花きりん 二人は去りて花のこりをり
うぶすなの土をたづさへ海を行く祖父なりしかな家具のごとくに
船上の祖父のゆふべの慣ひにてうぶすなの土を踏みぬしといふ
行きて見ん祖父のからだの還りたる南水洋のあをのしづもり
×2の速さでチェックしてをりぬ遠隔授業用の動画を
ふるさとに水草の根をのこしつ終に帰らなかつた鷗外
春むかし「茂吉」を追うて立ち寄りし亀の瓦の旧大社駅
とほくまで届いて跳ねるやうなこゑ 三島由紀夫の声を伝える

ダダ星人のダダのめぐりにたしかなる軌跡のこしてゐるダイズム
うつしよの五十一年生として名を呼ばれるれば「はいー」と応へる
人かげが手すり拭きつつくだりたり向かひのビルの非常階段
余所のうちではどんな話をするのでせう知命を過ぎたむすめと父は
星一つじんわりと湧きすつと消ゆ真正面より来たる流星
藤井聡太棋士の食みたるモンブラン（勝負おやつ）の列につらなる
すなはまを裸足でゆけば木蓮のはなびらほどの暗闇がある
昇りゆく鳶はひかりをはたたり白ひといろのやうなひかりを
ふるさとを離れし日よりゆふぐれの海のむかうはいつもふるさと

優秀作品 いのちのかたち 高橋 梨穂子*

本当に生理が来なくて気づくのね まるさんかくしかくいのちのかたち
ブルーベリー大のひとにも心臓があつてエコーの画面に光る
「はじめて」を二から順に積み重ね気づけば二十八度目の春
いつの日かまた去るだろう街にいてそれでも増えていく診察券
妊娠がわかつてからの毎日は自らが人体の不思議展
いくらかは格好つけて歌にする日々につわりは詩的に詠めず
エネルギーこの体から集められ作られていく小さなまぶた

羊水の記憶を持たないわたしから見える景色も世界のひとつ

手のひらはひとりのものでは無くなつてまだ目立たないお腹を撫でる

聴診器どこに当てても素人のふたりじゃ見つけられない心音

きみはまだ、存在、しない助成金受け取ることのできないのち

六月のみどり切り取る窓枠と流しっぱなしの国会中継

羊水の中に向かって解説をしながら作っていくカポナータ

「妊婦」から解放されて友とするビデオ通話に映らない腹

水筒を斜めがけた子どもらのまたがる遊具のパンダのまるみ

コロナ禍の待合室の月刊誌誰からも手に取られないまま

老医師が目尻に皺を寄せて指すわたしの中にある男性器

母似でも父似でもなくきみだけの顔だと思ふエコーの写真

付き添いはまだ不可のまま 自動ドア開閉するたび揺れる張り紙

あきらめたことを数えるのをやめて夏のうつわに盛るカポナータ

何回も漢字辞典を繰る日々に「膀胱」にある光に気づく

かろやかにワンピース着てゆく夏にこの身もきみを抱えたいつつわ

色の違う短冊とペンそれぞれに選んで同じ願い事書く

親父にもぶたれたことのない体きみは内から何度でも蹴れ

少しだけ群れから遅れる仔鳥の小さな陰を仰ぐ 頑張れ

優秀作品 みづいろの本

田中 泉

硬水のイングラントに軟水のスコットランド 紅茶のむ国

にがりなき水に饑^うえる人あまた生きる地球はそれでもあをし

手を洗ふみづ買はむとし食ぶるもの減らす人ありナイロビの路地

ていねいに水を使へり三十年東南アジアに近き夫は

「水おとこのいるところ」とふイタリアの絵本うつくしみづいろの本

あけ放しの蛇口から生まれ村へゆき泉のみづになりたる男

「海で貝、ひろいたいな」と蜆汁の貝をつぶさにさらふ幼子

廊下には小川の流れオンライン授業のすすむ書齋を隔つ

手首まで水は滴り皮をむく遙かなるかな船橋の梨

終点の堺駅まで行つてみよう いちばん近い海に行かうよ

「東洋のベニス」でありしこの街の濠はあまねく埋め立てられし

あかつきの潮の遠音は聞こゆるか駅前建つ与謝野晶子に

小柄なる晶子の像は目線あげ港の先の海を想へる

フランススコ・ザビエルも着きし港いま「親水プロムナード」に暮れる

プライベートヨットが泊まるその列の一艘ふいに動き出したり

夏の日 堺旧港ゆき交ひし南蛮船の影もよぎらず

ポルトガル、スペインの船S.A.C.A.Y.に直に入りし記録なしとふ

鉄砲の伝来した地、堺なる鉄砲町にイオンモール立つ

子を連れてリトル・マーメイドにパンをえらび「薄ら氷に似し」童話おもほゆ

静もれる旧き港より帰り来てわれのこころに水の湧きいづ

佳作 ハナアブ

坪井 真里

ひえびえと机や本をたくはへて大学は春、夏を立ちつくす

ゆつくりと往けばラベンダーの花かをる理学部棟の前の小径を

三日後はイギリスにある封をしたわたしの個人情報のみが

社会人学生われの引きよせし留学の機は遠くなりつつ

群れたがるヒトからヒトへ移るとかコロナいきほふ新宿にまた

格好の標的にされたる〈夜の街〉その近くにてわれは働く

つばくろの番切り裂く朝の空こつばめ狙ふハシブトがゐて
「どうしても、今日、新宿へ？」と聞く夫われの頑固に口を嚙みぬ
リモートで在宅勤務の夫にも外出のわれにも玄米むすび
緊急事態宣言だされ新宿に身動きできぬビルがのこさる
九階の日本語学校閉鎖といふ若きらは無事帰国できたか
コロナ禍に家賃、給料払へぬとの相談聞くも仕事のひとつ
弱小のNPOの事務仕事荷がおもたしよ六十八に

真面目とは不器用のこと雪ふかき町に育ちしわれの鈍重

旨ければ〈大名下ろし〉で上等と真面目な母はときに豪胆

「いつ帰る」とつねは尋ねる母なれど「帰るな」と言ふわれはウイルスか

北国に路やはらく太る春湿り気おびて土にほふ春

「二密」を避けんと軒で商ひす焼き肉屋さんでナムルを買ひぬ

金策の相談あると呼ばれたり長く縁あるリサイクルショップに

コロナ禍で子ども食堂、炊き出しのできずと聞けば身はひきしまる

頑健な男が子らに弁当を配りたいのだとはにかみて言ふ

できることわづかですが、と応へれば礼を言はれて恐縮したり

大都会のコンクリートの割れ目から種まく人に幸あらんことを

土もなく力もなく飛びまはるわれはハナアブ人から人へ

励ましがうれしかつたといふ人の今の笑顔がわれへのエール

人が人に出会ひ実を成すこともあるもう少しハナアブであらうか

佳作 スペイン風邪

水 辺 あ お

風邪だとは思ふけれどもどことなく胸のあたりがいつもと違ふ
日本人だけで四十五万死す百年のちのコロナ明かせり

カンザス州ファンストン基地軍病院ごつたがへせり発熱兵士で
潜水艦ハッチ閉めればうす暗き密室世界、空気が重い
昼夜なく死傷者は増え英独軍羅患明かさず戦死に数ふ
あつさりと中立国のスペインに汚名負はせて百年経ちぬ
めくるめくシンガポールの夜を経て軍艦矢矧水兵が咳く
罐焚^{かまたき}に高温多湿でダウンしておろおろ進む快速矢矧
烹炊^{はうさい}兵次々倒れ四百の風邪ひき兵に飯と塩のみ
軍医長、看護手までも寝込めばや病原船となりて帰国す
学校で子どもがうつり十人の家族にうつる^と与謝野寛家

「呉服店、興行物を閉鎖せよ」^と与謝野昂子は政府に迫る

夏場所を休む力士が続出し〈相撲風邪〉とも人ら呼びたり

親もとを離れて暮らす女工らが寝込み汗浸むせんべい布団

火葬場で死者の家族が振り返るとぎれず並ぶ死者と家族を

大君の姫を娶りし貴人もやはやり病にとりつかれたり

用心し宮妃殿下は早寝せり宮家老女は無理して斃る

うらわかき皇位継承第二位の皇子、兵舎にて感染したり

皇后が神に祈れる刻に合はせ〈血清注射〉が皇子に打たる

治癒したる皇子成年式の宴時局鑑み延期せりけり

北里書くインフルエンザ菌血清・肺炎双球菌血清推すと

全世界全人口が感染し抗体持ちて終りたりけり

佳作 風を二分け

手 塚 寿々枝

ついに天はわれに白馬を遣はせり地を響かせてハーレーが来た
鳥になり風の秀^はになり霧ヶ峰ヶ原をタンデムで駆く

忘れるし若きころの熱もかも鉄馬休ませ高原に付つ
全身を貫くエンジン音と風亡き弟の写真を連れて

峠道みぎにひだりにローリングするとき背骨はしなやかな弓
ローリングするたび体は独楽の芯重心低く斜に構ふ

ひたすらにフイトンチツドの濃き森を駆ける駆けるよ風を二分け
九台のハーレートのしんがりを駆りゆくパッセンジャーなれども
浅間山狼煙のごとく煙上げツーリングするわれらを囁す

大型のバイクの会の猛者たちに交じりてひと日時を攻める
百キロを越ゆる速度はバイクなら空気の粒子がかほにめり込む
空と海じんわりとけ合ひ銀に光りわが生はいよよ佳境に入るか
みすずかる信濃の風にまたがつて密々と濃き森を越えゆく
人の生は思ひもよらぬ変のあり古希越えて来るハーレーの舟
ドライバーパッセンジャーとも古希を越ゆ必然として遭ひしわれらか
老われらアウトローかもトライクで人目気にせずタンデムなんて
幸せと言ふべきさが七路でバイクに恋するメリーウイドーよ
青春を詩ひしサミュエル・ウルマンの言の葉立ち来けふは三たびも
死者が出るまでの猛暑日ツーリングする一団のわれそのひとり
目の下は濃密な樹海吹き上ぐる風に憩へりライダーたちと

佳作 夏うらがへる 三 沢 左 右

鳥は胸に空もたぬゆゑ飛ぶならむ空を呼吸し空食すならむ
あざやかに君の毛先が透きとほる稲妻を見てしまつた夜に
痛みなき痛みのやうに雨を受く梅雨果つる日の真昼の底に
飴玉がまだ常温で溶けぬ日の心づくしの鱗を舐めとる

三台のフォークリフトが停まりをりかたちちがふ尻を寄せ合ひ
とりよせし戸籍謄本母の名の二字が旧字であるを知りたり
まだ何も置かれてゐない天板を見てみたくつてテーブルを買ふ
テーブルの対角線にマグふたつ置かれて月の軌道を思ふ
のりしろを大きくとつて箱つくるやうに婚姻届書き終ふ
炭酸の缶飲料を冷やしつづ加法混色の写真を見をり

三枚の絵を描き終へて絵のためのメモ三枚をぐすんと握る
つまびけば夏が鳴るなり垂直に白く下がれるブラインド紐
道を行く人それぞれに日の当たり写真主義の色調をなす
窓と雨と窓をへだてて隣り家に影絵のごとし夫婦喧嘩は
熊蟬は羽にござらせて死にてありひとりびとりにちがふ雨ふる
くつぞこは雨の翌日剝がれ落ち旧字のやうな足あとのつく
掃き捨つるわれに幸あれ階段に背中を見せて死ぬるカナブン
夜の町の底に自動車くろぐろと立ち上がりをり穴のやうなり
階段にかぎを落としつ階段を二段戻りて駆け上がる、また
ウエディングドレスが裾を曳くやうに宇宙の裏に飛ぶはうき星

佳作 夏は通ひぬ 斎 藤 美 衣

山際に光は差しぬ光へと向かふ電車に乗り込んでをり
ほんたうにみぢかい春だ尾の太き犬が空気を嗅ぎ分けてゐる
ゆらゆらと日傘が揺れて白マスク、白手袋の祖母が帰宅す
入居待ちのホームのことをシベリアとカープの話のあひだに聞けり
記憶には降りやむことない雪が降る雪のむかうの輪郭のひと
靴底に実家の芝の一本がきのふとちがふ色をしてあり

子はいつも同じ木ばかり描いてゐる先の尖つた葉の濃く茂る
結んでは解いてしまふあやとりの太くて赤い毛糸の重たさ
野菜にも筋肉があると子は言ひぬ今日のキャベツは筋肉多し
岩波の少年文庫ひざに載せ『モモ』を手に読む雨音の部屋
もうすつかり疲れたんだといふ父にトマト素麺のことだけ話す
まつすぐな身体が欲しい何ものもとどめることなく流せるからだ
引力の強き夜なりオシロイバナ赤きも白きもまばたきもせず
ものばかり質量のあるこの部屋に粒子の荒い西日が差しぬ
夏の木をやうだと思ふ七歳は起きてくるたびゆたかになりて
まなざしに少し遅れて発車するあなたを乗せた緑のバスは
透きとほるグラスの中の透きとほる水をからだに注ぐ八月
泣く前は鼻の奥から潮風が吹くみたいだね、ねえお母さん
煙のやうな時間は過ぎて もう産まぬしろき腹部はやはらかくあり
木のなかに夏は通ひぬ手のひらを当てればどとん、どとんと触れる

佳作 樹雨

末 広 芳 子

考ふる事より思ひ出す事のおほくなりつつ八十五歳
グルコサミン・コンドロイチンの白錠を飲んで養ふ老いの足・腰
木に熟れて終は真黒の桑の実を「どどめ」といふをこの頃知りぬ
ヴェルレーヌ、シュトルム読みてあけくれしわが少女期は白き綿菓子
六十の自祝に求めし絨緞の色あせせずして二十五年目
分にすぎぬ敷物なれどペルシアのアトモスフェアはくらしのいづみ
雨の中こしも寺の沙羅の木の初花見をりとほく訪ひ来て
（白き花はたと落ちたり）鷗外が詠みて愛でにしその白き花

佳作 よこしまなこと

山 崎 洋 子

『天籠』を書きて壮の鷗外をしのびてあふく沙羅の木の花
籠る日のすさびに作るをばすての信濃の山の椿桃のジャム
雨やみし夜空のみなみ金色に小櫛の月がさびしらに光る
あふむきて落ち蟬まろぶ朝の庭に掲諦・掲諦と降る蟬しぐれ
ゆふやけが椋の枝間を染むる頃子より五島のうどんが届く
老いらくのあてなる滋味にふれたくて雨夜をひらく『白秋陶像』
はなあふ濡して白雨すぎにけり あとなる空に見ゆるふるさと
玄關にマスクしたまま使ふなり除菌のティッシュ・消毒スプレー
折り合ひをつけて生きゆく平凡の智慧を説くなり解剖学者
今まさばいかにおもはむコロナ禍を官人にして医学者鷗外
落ち蟬も沙羅の落花もひとしなみに樹雨がぬらすあけがたの夢

「鬱」の字がストーカーとなりつきままとふ今日の子双子座最悪といふ
告解をするかのごとくのろのろと病状告げる心療内科
見られてる見透かされてる本心は言葉の端に滲み出るから
忌まはしき記憶は記憶 うそはうそ 心が曇つて元気が出ない
ただでさへ傷つきやすい少女期に追ひ打ちをかけた父の病は
思春期はさなきの時代くりかへし繰り返し「ボヘミアン・ラブソディー」
O型も運動音痴も父譲りその父の死より三十年経つ
思ふことと思ふがままに言ふ母にあらがひきれぬままの青春
封印したはずの悪夢がつぎつぎと 頭のなかで地球と踊る
生きてゆく必須の思考のみを持つ蟻をうらやましく思ふ、いま
いつはりのわが身をさみしく思ふとき罪悪感^{フレイグ}は遁走曲^ガを奏でる

新人類と呼ばれてゐた頃バリバリのキャリアウーマン目指してゐたころをんなひとり、ピンヒール履き武装する激しい競争に勝ち残るため不透明な先行き憂ひてくちびるに手足の爪に赤い色塗る新作のマニキュアゆゑに爪先は刃のやうな鋭さを持つちはやぶる神知りたまふ(へい人)の仮面を外したすつびんの顔人生はやり直すことできぬもの眩暈にも似た^三持て余す真実を殺さうとして真夜中に肺から吐き出すよこしまなこと

佳作 二か国時計 山口 照子

人生をとにもせむとは誰ひとりには言はれざるまま五十六の春仕事持つことはたふとし続けられば車椅子にて褥瘡できぬ仕事持つことはあやふし八時間パソコン打ちて褥瘡できぬ年間の収支簿すみずみ確認す一円とても違ひてはならず定時にて退庁したり「お先に」と車椅子より笑顔で言ひてわが仕事をしてゐる同僚思ひては寝返りを打つ病休初日必要とされてゐるのか十年余り異動の無きは折々にふと思ひ出す彼のひとたとへば柚子を買ひしことなど体力と仕事と治療の兼ね合ひを勘案すれば異動ためらふ昨日より強くなりたしバナナ食ベジャケットを着て出勤しをり二回以上も若き同僚に逐一業務の教へ請ふわれ障害のことを言ひてもすんなりと君は四角いあごでうなづく前輪を上げて段差を越ゆるとき車椅子ごと君に身預く四十年前に出会ひし知りびとが恋人となる五十六の恋止まりたる時計の電池入れ替へてわれの時間が息吹き返す

外国に行けざるわれの掌の上で君と見つめるローマの時間

佳作 八十八夜 白川 ユウコ*

はつなつのひかりのなかに摘まれたる茶を買いにゆく八十八夜(青海)の縞の遠州綿単衣の仕立てあがるのを待つ赤い字の「神様立入禁止」なる家が雄踏街道にあり炭カルの袋に規則書かれおり日本語・英語・ポルトガル語で女子会は本の交換会を兼ね鷹匠町につつくガレット戦場となりたることのあらざれば石垣なだらかなる駿府城静岡の店員さんは笑顔よし街角に咲くランタナの花「図書室の本持つてますすみません」小学校の担任と呑むプールから帰る身体に沁みる味くろはんべんのおでんとファンタ安東のながるる松藻さかのほりみなもとを見る十二双川安西橋こえて薬科川橋をこえてペダルをまわしつづけるわれと夫と三島の親が河豚食べば骨をきれいにわける一族県東部の天気予報を見ておりぬ未来の暮らし三島にあればお祓いを三嶋大社で受けし夫巳年生まれの方塞お茶碗のかけらばっかり沈んでた 義母のむかしの源兵衛川は染付の白磁に青き花の絵の水にくだけてうつくしからん

☆ ☆ ☆